

初めてのオンラインJICA国際研修

結核研究所

国際協力・結核国際情報センター長 山田 紀男

JICA 課題別研修「SDGs 達成に向けたUHC時代における結核制圧」は、COVID-19パンデミックのため来日研修ではなく、2週間のオンラインでの実施となった。7か国から9名のJICA研修員と中国の参加者が研修を修了した。

世界的にCOVID-19が結核対策に影響を与えているため、COVID-19の結核対策への影響とそれに対する対応策に焦点を当てた研修とした。この際COVID-19を結核対策への問題とだけとらえるのではなく結核対策強化への機会と捉え、患者発見強化や潜在性結核感染症治療など、影響からの回復だけでなく結核制圧に向けて貢献できる内容とした。また、COVID-19パンデミックはこれまで経験のない事態であり、状況も変化しているので、通常以上に各国の経験のシェアを重視することとした。通常の研修では対策改善案や対策改善強化研究案を作成することが重要な研修目的となっているが、今回は短期間でありCOVID-19の影響は今後も変わる可能性があるため、研修で講義・討議から得たものを自国のCOVID-19パンデミック下またはパンデミック後の対策強化に生かしてもらうための素案としての対策改善活動案の作成と発表を行った。

具体的な研修方式としては、参加者の間で最大8時間時差などを考慮し、講義は都合の良い時間に視聴できるように事前収録ビデオのオンデマンド配信とし、定時（日本時間の午後3時から5時）のオンラインセッションでは質疑・討議・発表を行うという方法を採用した。今回もWHOの協力を得て実施し、西太平洋地域の状況に焦点を当てたグローバルなCOVID-19の結核対策への影響と対応策の講義を、WHO西太平洋事務局Tauhidul Islam氏に依頼した。また、研修員から評価の高い視察研修の代わりとして、新宿区保健所で講義と研究所職員から保健所職員の方への質疑応答を収録し配信した。COVID-19対応で多忙を極めていたにもかかわらずご協力いただいたカエベタ先生と石原様に、この場をかりて感謝いたします。

研修の成果であるが、全体として目的を達成という

研修員からの良い評価を受けることができた。良かった点として、他の国の経験を学ぶことが挙げられた。改善すべき点としては、活動案作成が挙げられた。本来、活動案は各国の状況を掘り下げて分析し方策を検討する過程が必要であるが、今回は時間的制約があった。今後、同様の短期オンライン研修を行う際は、集中講義の期間と改善活動案発表までの間をあげ、その間に個別指導をおこなうというような方法が望ましいと考えられた。実施環境とオンライン研修の利点は、インターネット環境が整っていれば場所を問わず参加できることであるが、これは良好なインターネット環境が必須ということになる。今回ネット環境が整っていない研修員へはホテル滞在が提供された。また今回Google Classroom (Google LLC) というサービスを使用した。国や職場により使用できない場合があり、その際は別の方法で対応した。複数の方法を組み合わせて対応できる体制を作っておく必要性を実感した。今回の研修は、結核対策及び公衆衛生対策全般に貢献できる人材育成を目指す通常の研修と異なり、COVID-19パンデミックという特別な状況下で実施された短期研修であるが、今後も今回のような事態は起こり得るため、今回のオンライン研修実施はよい経験になったと考えている。🐼



「研修最終日の様子：JICA 東京 Facebook (<http://www.facebook.com/jicatokyo>) より」